



碧南ロータリークラブ週報

第2575回例会 平成23年12月21日(水)

● 会長 石川 春久 ● 幹事 平岩 辰之 ● 会場監督 (SAA) 新美 惣英

2011-2012年度 国際ロータリーのテーマ

- 例会日 毎週水曜日 12:30
- 例会場 碧南商工会議所ホール
- 事務局 碧南商工会議所内 〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90
TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100
ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp/>
E-mail: info@hekinan-rc.jp
- 会報委員 鈴木健三・菅原 優・永坂誠司・鈴木宏枝



こころの中を見つめよう 博愛を広げるために

● 齊 唱

ロータリーソング「今日も楽し」

● 本日のメニュー

季節のお弁当 とんがり帽子

● 本日のお客様

中部大学西洋美術史学 講師、岡崎市美術博物館協議会 委員 阪部晃代氏

会 長 挨拶

冷え込んで参りました。

今回は衣浦GHにてクリスマス会を行います。先週に引き続まして江戸の話をさせていただきます。

常識やぶりの商法と規模で江戸一の有名店

江戸は日本橋駿河町にあったファッションの本店、越後屋三井呉服店は江戸名所のひとつだった。

商店が名所？などと疑うなかれ。葛飾北斎、歌川広重のような大物絵師たちも、三井の店を風景画として描いているし、細密画の大家だった長谷川雪旦も『江戸名所図会』の挿絵にこまごまと描いているほどだ。

こんな店は江戸広しといえども他にはない。着物用の反物を売る呉服店は、昔からはなやかな商売だったが、なぜ越後屋が、これほど有名で人気があったのだろうか。

三井呉服店の創業者三井高利は、伊勢松坂の出身で、17世紀はじめの寛永頃に江戸の兄のもとで呉服の商売を習った。その後、息子たちとともに江戸で自分の店を開いた。江戸には呉服屋がたくさんあったが、その中で三井が大成功した最初のきっかけは、薄利多売の新しい商売をはじめたことだった。

それまでの呉服屋は掛け売り専門で、売った商品の支払いは盆と暮れの「節季払い」だったから、店はその間の金利、貸し倒れのリスク、集金の手間などを考え、かなりの「掛け値」をして売らざるを得ない。

ところが三井高利は

「現金掛け値なし」

というスローガン掲げて掛け売りをやめ、リスク分だけ大幅に商品価格を値引きした。

良い品物を安く売れば売り上げが伸び、仕入量が増えればさらに値引きできる。この新商法は大評判になり、越後屋三井呉服店は日本一の本店となった。寛政3年(1791)には、日本橋の店の



石川春久会長

従業員だけで792人いたそうだ。今なら中規模の企業だが、当時としては日本最大の本店だったのである。

さらに、越後屋はサービスでも客の心をつかんだ。雨の日の傘の貸出しや、チラシ発行などは越後屋が発祥である。

三越百貨店の前身でもある越後屋三井呉服店の店舗は、現在の三越本店と三井本館との両方に分かれていて、それぞれ太物（木綿・麻類）と呉服（絹物）を扱っていた。また、両方の店の間の道から西を見た真正面に富士山が見えることでも有名だった。越後屋に関する川柳の句は非常に多いが、

「富士山を越して木綿を持ってくる」（安永4年万句合）や、

「富士山は絹と木綿の合いに見え」（安永7年万句合）（ともに現代表記）

などは、この光景を詠んだ句である。

最初に紹介した3人の絵師の絵もすべて、両方の店と富士山を1枚の絵におさめているほど有名な景色だったが、今は高いビルが西空にそびえていて、残念ながら富士山は見えない。本日の講師は西洋美術の専門、では私は和美術をと話してみました。

幹事報告

- ・例会変更等は幹事報告書通りです。
- ・小伴店様より、お歳暮を頂きました。ありがとうございました。
- ・2760地区ガバナー事務所より、5月5日～10日の予定で「バンコク世界大会参加」に際し地区でチャーター便を一機計画しているそうです。

国際大会へご参加の方は、事務所までご連絡ください。

- ・ロータリー財団管理委員会、東日本震災復興基金日本委員会委員長より、「ロータリー・カード普及、取得のお願い」が届いています。

ロータリーカードのロイヤリティを復興基金として利用するよう決定しております。個々に御協力の程御願います。

- ・今週25日日曜日、今年度碧南RCの「クリスマス・家族会」が衣浦グランドホテルにて午後5時より開催いたします。受付は、午後4時30分からです。



平岩辰之幹事

委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数71名(内出席免除者14名の内出席者10名)出席者60名	
出席対象者 60/66名	出席率 90.91%
欠席者11名(病欠者1名)	前々回修正出席率 100%

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

〈ニコボックス委員会〉

- 杉浦 健次君 ロータリー財団の個人寄付をお願いしました処、石川春久会長、杉浦求会員、西脇博正会員、藤関孝典会員には早速の入金ありがとうございました。クラブ扱い特別寄付と共にロータリー財団への振り込みを行いました。感謝、感謝。
- 鈴木 敏弘君 12月15日RCゴルフ例会、毎年お土産付きのところ、優勝させて頂き、二重のよろこびでした。ありがとうございました。
- 角谷 信二君 本日の卓話講師 阪部晃代様を紹介します。
- 平松 太君 といち、といに、RMC、放射能、バラバラ、サイクリング&マゴコロ、楽しい時間を過ごしました。

卓 話

「名画の名画たる所以を「知る・見る・感じる」

中部大学西洋美術史学 講師

岡崎市美術博物館協議会委員

阪部 晃代氏



阪部 晃代氏

本日のタイトルから、何かややこしい話をするのではないかと危惧される皆様には特に、絵画を「見る」趣味を始めてみませんかと勧めております。

絵画の鑑賞法は従来は「見て」「感じる」というものだったと思います。それはそれで悪くはないのです。この長所は第一印象を大切にすることだと思います。しかも感じる心を大切にしているのですが、皆さんが展覧会鑑賞の最後にはどうしても「疲れちゃった」という言葉をさかんに聞きます。そこでお勧めの鑑賞法として、「知っている」作品を思い浮かべながら見る方法をお勧めしたいと思います。この言わば「物差し作品」の鑑賞法の短所は、まず物差しとなる作品を覚えなければいけないことですが、すぐに納得していただけるので一度お試しください。

本日は4つの作品について、これらの名画が名画たる所以の理由を話させていただき、この鑑賞法の良さを説明させていただきます。

まず、巨匠とは今までにない「新しい」表現を創造した人です。

名画とはその「新しさ」が最も反映されている作品の事です。又画家にはそれぞれ、色々な「力点」があることを知って下さい。

○レオナルド・ダ・ヴィンチ 「モナリザ」 1503年6月頃 ルーブル博物館

・新しい技法

「空気遠近法」の凄さ→遠くのを小さく描かなくても「青く霞んで描く」だけで自然な奥行感が出る。この技法を最も顕著に表しているものが「モナリザ」である。それは「自然な（見たまま）」表現を達成した点であります。これ以降の作者（例：ラファエロ）はこの技法を用いて追従していきました。

○ジャン・フランソワ・ミレー「落穂拾い」 1857年 オルセー美術館

普通、「農村はのどかだな」「自然はいいな」と皆さんは思うでしょうが、そもそも落穂拾いとは最下層の農民に許された最も辛く激しい労働でした。この作品をよく見ると絵の中に「前景（落穂拾い）」対「後景（本来の収穫）」が描き出されている。

この絵の凄さとは作品の中に色々な階層が描かれており、その中の最も最下層の人々にスポットを当てたことである。新しい主題（描く内容）を開拓し、現実世界をありのままに描きだしたことである。

○クロード・モネ「夕日の積の藁」 1890-91 ポストン美術館

印象派が出現する以前の絵画は色が暗く感じていた。

「暗い」対「明るい」=固有色の否定

「黒い」影 対「明るい」影

印象派の絵画は影の固有色が用いられていない→明るい画面の創出：固有色の否定「黒以外の色」で色彩表現をした

○フィンセント・ファン・ゴッホ「鳥の群れ飛ぶ麦畑」ゴッホ美術館

皆が「暗い絵だな」と思う。→不穏な表現＝目の前の光景を描くのではなく、その時のゴッホの心の内が表されている→ピストル自殺する前に描かれた遺書的な作品

まず、画家の人生に注目してみる。画家とし自活できず、愛する弟に支えてもらいながら制作する。→実際の場所に行ってみると目の前の光景を「そのまま描いたのではない」と分かる。その「凄さ」は「炎の画家」と呼ばれる所以であるが、

「目の前の光景」＋その時の「画家の心の内（精神性）」

以上4つの名画を比べて、感性のみで見た時と絵画の背景を知ってからあらためて見るのでは、いつもの絵画を見る時とは違って来たのではないのでしょうか？

これからは従来の「名画」を物差しにして、それ以外の作品を比較して鑑賞してみてください。今後、絵画鑑賞が楽しく身近なものになるように感じて頂けたら幸いです。

次回例会案内 平成24年1月18日（水）
卓話「ロータリーの新長期計画 特にRLIについて」
地区研修委員会 委員、研修リーダー（RLI）成田 洋之氏